HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	作業療法学科卒業生の就職状況について ： 第10期生までの就職の動向
Author(s)	大宮司, 信; 吉田, 直樹; 河野, 仁志 他
Citation	北海道大学医療技術短期大学部紀要, 8, 15-21
Issue Date	1995-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/37584
Type	departmental bulletin paper
File Information	8_15-22.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

原　　著

作業療法学科卒業生の就職状況について
－第10期生までの就職の動向－

大宮司　信・吉田　直樹・河野　仁志・真木　　誠・村田　和香*
深沢　孝克・丸谷　隆明・末永　義圓・上野　武治

The Employment Situation of Graduates from the Department of Occupational Therapy
－ Several Characteristics Seen from 1st through 10th Graduates －

Makoto Daiguji, Naoki Yoshida, Hitoshi Kawano, Makoto Maki,
Waka Murata*, Yoshikatsu Fukazawa, Takaaki Marutani,
Yoshimaru Suenaga and Takeji Ueno

Abstract

Sutudents up to 10th term of our department were examined for their employment opportunities. The ranking of their first employment was as follows : the area of physical disorder, mental disorder and senile disturbance. Also by graduation team, the respective characteristics were noted in these fields.

Recently, employment opportunity for students tends to increase in the psychiatric field. As seen from the graduates' overall places of employment for each year, the job opportunity decreased in the area of physical disorder gradually. The result also showed that there is an increase in the number of graduates who left the job mainly because of marriage.

In terms of change of job, many of those who have given up their psychiatric field took up other fields (especially, area of physical disorder). In view of the above results, the future prospect of job opportunity for occupational therapists' was also referred to.

北海道大学医療技術短期大学部作業療法学科
＊北海道教育大学大学院教育学研究科
Department of Occupational Therapy, College of Medical Technology, Hokkaido University.
＊Graduate School of Education, Hokkaido University of Education.

要　　旨

当学科の10期生までの就職状況について検討した。初回の就職先としては身体障害領域が最も多く，ついで精神障害，老年障害の順であった。また卒業期によってもこれらの領域別には特徴が見られた。特に最近では精神科領域への就職が若干増えている傾向が伺われた。また各年度における卒業生の延べの就職領域を見ると身体障害が次第に減っている。さらに離職する者が次第に増加している傾向があった。転職に関しては特に精神科領域から転職した者が精神科領域以外の分野（特に身体障害領域）に移る者が多いことがわかった。これらの成績から作業療法士の将来の需要供給関係にも若干ふれた。

1　はじめに

北海道大学医療技術短期大学部作業療法学科（以下，当科）は，平成６年度末までに第12期生を卒業生として送り出した。この間医療状況は刻々と変化を遂げているが，リハビリテーション領域において作業療法の重要性がますます増加していることは周知のこととなっている。このような背景から臨床現場における作業療法士の需要は年々増加している。

北海道では当学科と札幌医科大学保健医療学部作業療法学科の各20名，計年間約40名の卒業生を送り出しているが，この数では十分に作業療法士の需要に対して応じきれず，最近では新しく作業療法士を育成する学校の設立も具体化してきている。さらに最近の保健医療状況の中では老人の重要性が増し，この領域における作業療法士の活躍もますます期待されている。

本論文では既に当短大を卒業した当科の第１期生から第10期生までを対象とし，その就職動向について検討したのでここに報告する。

2　対象と方法

対象は北海道大学医療技術短期大学部作業療法学科を卒業した第１期から第10期生までの卒

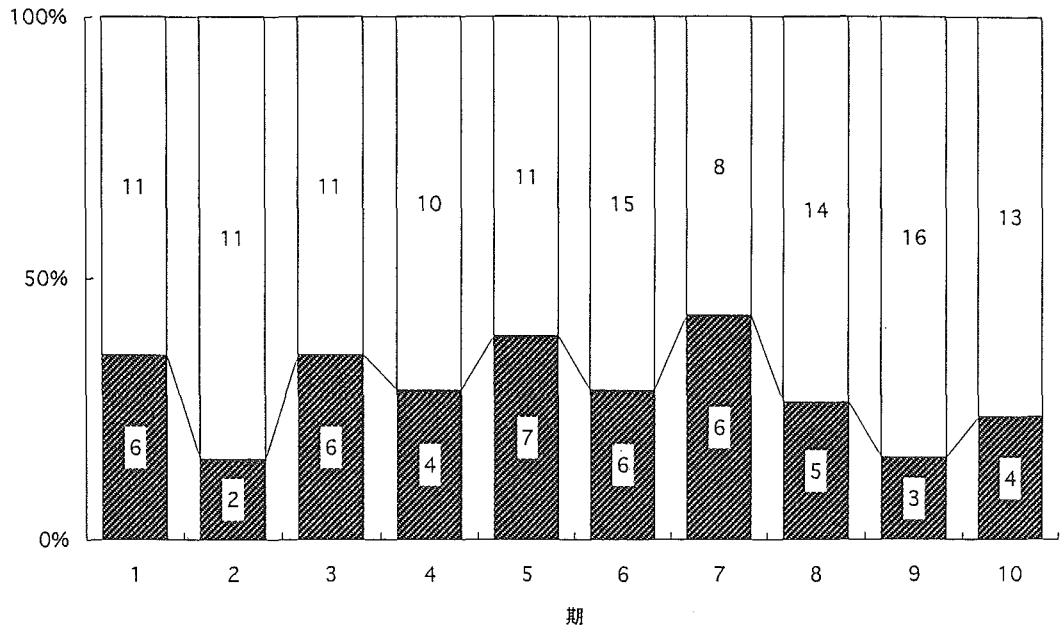

図１　各　期　の　男　女　比
卒業各期の男女比を百分率で示す。各コラム内の数字は実人数（□：女，■：男）。

業生である。卒業者の総数は177名であるが，このうち卒業後連絡が取れないもの，また部分的に連絡がとれても本研究に必要なだけの十分な情報が得られなかったもの８名を除く169名を対象とした。

方法であるが，各卒業生の就職の状況については，各作業療法士からの情報，当科に集まる情報などを基に卒業先を検討し，さらに不十分なもの，また曖昧なものは直接本人に連絡を取って確認した。各就職先を身体障害，老年障害，精神障害，小児発達障害（領域については当科の臨床実習先の分類をもとにした），作業療法以外の就職領域に分類し，あわせて離職の期間（結婚・育児などで仕事をしない時期。非常勤の期間もこの中に含む）も検討した。これらを月数，人数などの実数値及び百分率で示した。

3　結　　果

1．対象者の分析

対象とした169名の性別の内訳は，男子49人（29%），女子120人（71%）である。図１には各期における男女の比率を示す。最近男性の比率が若干少なくなっている傾向はあるが，各期でそれほど顕著な違いはない。

2．初回就職の状況

図２に10期生までの全169人の初回の卒業後の進路の割合を示す。身体障害領域38%，老年障害18%，精神障害28%，小児発達障害10%，教育職分野１%，未就職５%（８名）である（未就職者は国家試験不合格及び個人的な事情から就職しなかった者である）。

また道内，道外で分けてみると道外就職者は13名（身障７，精神３，小児３）であり，初回就職者161名中８%を占めるのみで，92%が道内に就職している。

各期ごとの初回の就職先分野を図３（実人数），図４（百分率）に示す。一定の傾向を見いだすことは困難であるが，おおよそ次にように述べることは可能であろう。すなわち身障領域においては７期生のように例外的に少ない期もあるが，ほぼ安定した数である。

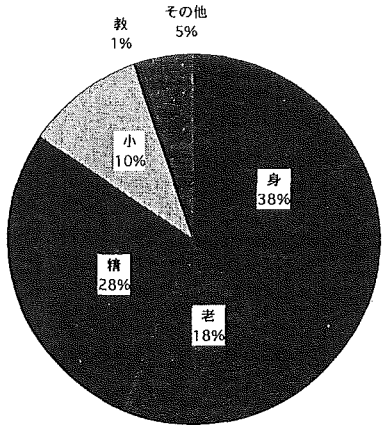

図２　卒業後の進路
全10期生の卒業後の進路を示す。
身：身体障害，老：老年障害，精：精神障害，小：小児発達障害，教：教育分野，その他：以上のいずれにも属さないもの（略称は以下同じ）。

次に老年障害領域では，５期生までは少ないが，６期生，７期生で一時的に増加し，以後一定で推移する傾向が見られる。また精神障害領域は８期生以降若干増える傾向が見られている。小児発達障害領域は就職先が少ないためか全体として少ない。

3．各年度ごとの各分野の分布

図５に1984年度から1994年度までの各年度はじめにおける10期生までの卒業生の延べの就職分野を，卒業人数で補正して百分率で示す。身障領域の占める割合が次第に減り，老年領域がそれにかわって90年度以降増えている。精神領域と小児領域は特にかわりない。一方結婚などで離職する者の数は年毎に増えている。

4．初回就職先から転職するまでの期間について

初回就職先から次の職場へ転勤するまでの期間を月数で計算した（初回就職から結婚して離職した者については事情が別なのでこの中に含めていない）。

１期から10期生までについては，身障領域40

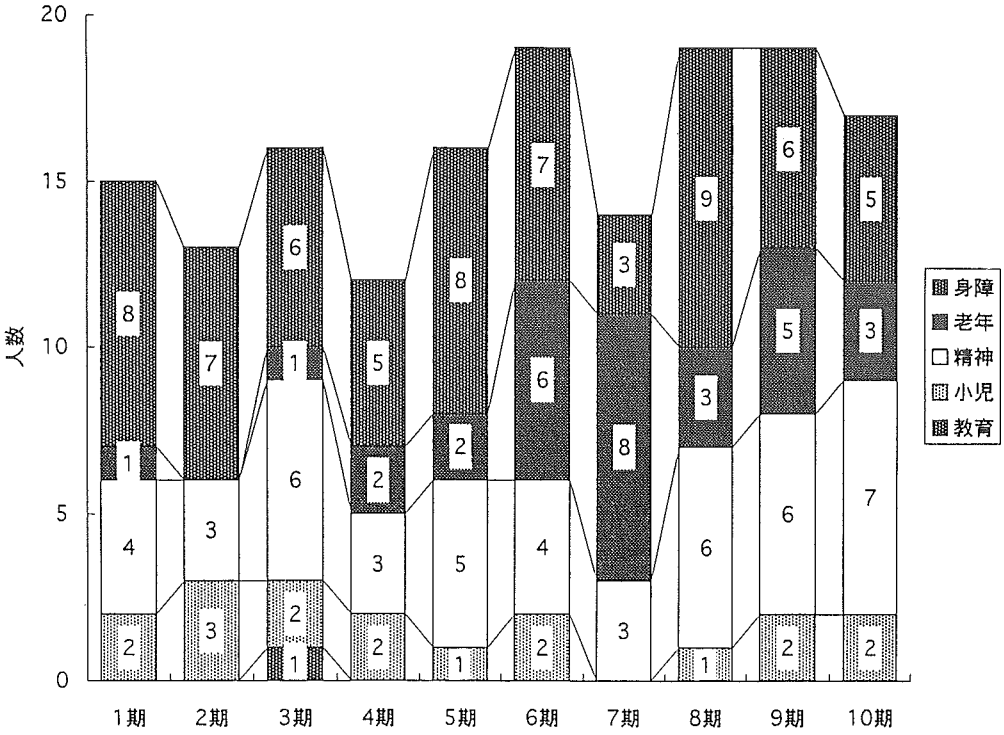

図3　各期の就職先分野（実人数）

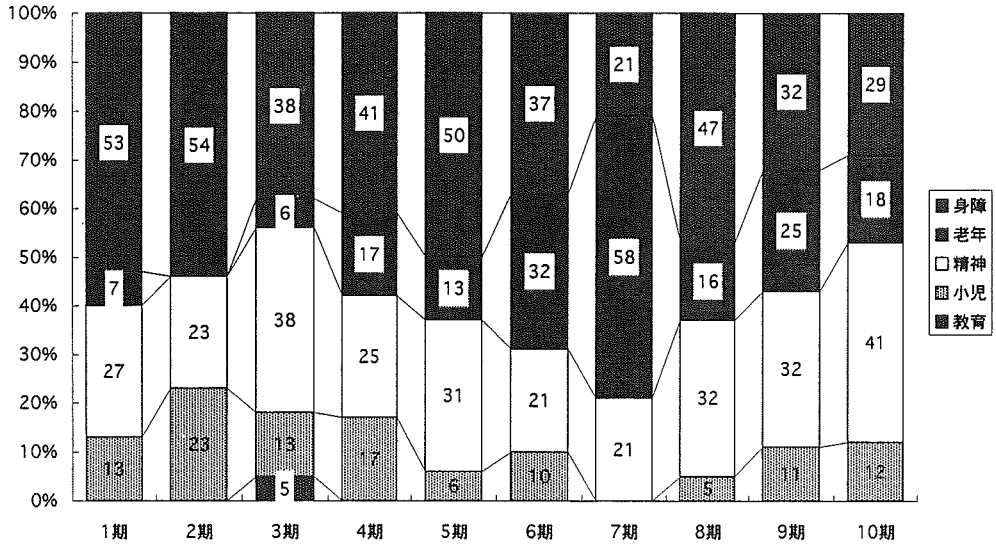

図4　各期の就職先分野（百分率）

±20（月数，平均値±標準偏差，以下同じ），老年領域36±11，精神領域37±17，小児領域56±25，全体としては49±19である。

初回の転職については1期生から6期生までが平成6年度末までにほぼ同じような件数（延べ11～16件）で転職しているのに比べて，それ

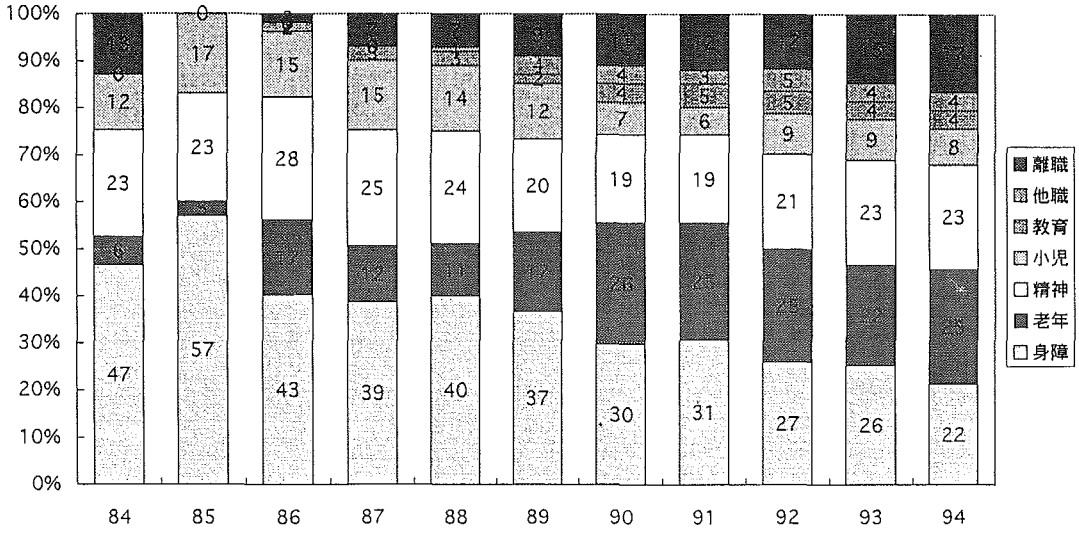

図5　卒業生進路分野
各年度の延べの就業分野を人数で補正した百分率で示す。

以降はまだ年数も浅いせいかそれほど大きな転職の動きはない。そこで1期生から6期生までの初回就職から転職までの平均期間も計算してみた。身障42±20，老年39±11，精神40±15，小児56±25，全体では42±18であった（なお1～6期各期別に見ても就職先の職種に関わらずほぼ一定（37～48ヶ月）であった)。以上から初回就職し，その後転職した者の初回就職先での平均勤務期間は3年半と考えられた。

5．転職及び転職先について

表1，図6に各領域別に，転職した者の延べ実数（初回就職先からの転職のみでなく，2回目以降の転職をも含む）を4領域に限って示す。人数上では身障領域からの転職回数が最も多く，ついで精神，老年の順になっている。転職先は身障領域から老年領域に，精神領域から身障領域に移るものが多く，老年領域からは身障と老年領域への移動がほぼ半ばしている。

次にこれらを百分率で示したものが表2及び

表1　転職について（実人数）

	身障	老人	精神	小児	計	%
身障	14	6	12	1	33	38
老人	19	8	5	2	34	40
精神	3	1	6	1	11	13
小児	5	0	0	3	8	9.3
計	41	15	23	7	86	
%	48	17	27	8.1		100

横軸は転職前，縦軸は転職後の分野を示す。□内は同一分野への転職を示す。

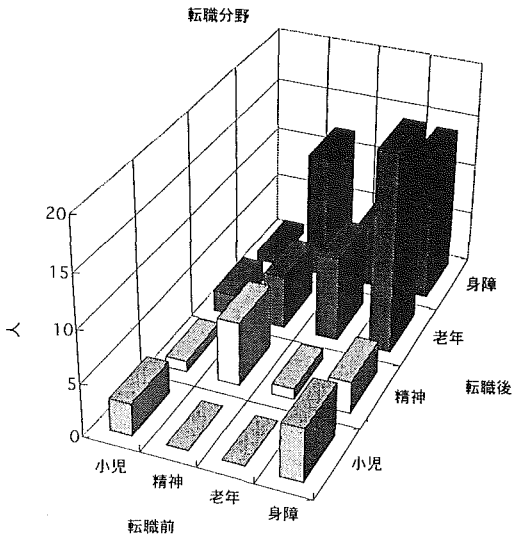

図6　転職について（実人数）

図7である。これで見ると老年領域と小児領域はほぼ同一領域に転職するのに比べて，身障領域や精神領域は同じ領域に転職する者が少ないことがわかる。特に精神領域では同一領域への転職は26%のみで，残りの74%は別の領域を目指す状態である。

表2　転職について（百分率）

	身障	老人	精神	小児
身障	34	40	52	14
老人	46	53	22	29
精神	7	7	26	14
小児	12	0	0	43

横軸は転職前，縦軸は転職後の分野を示す。□内は同一分野への転職を示す。

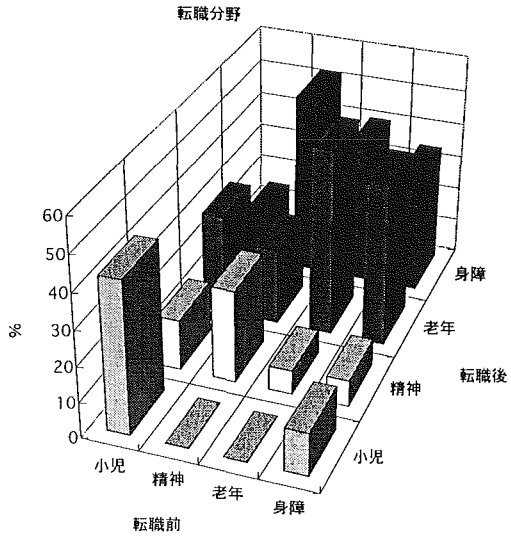

図7　転職について（百分率）

4　考　　察

作業療法士の養成のために国公立医療技術短大の中にも作業療法学科がおかれ，卒業生が巣立つようになって十数年がたつ。今回当科の卒業生の就職状況について検討したが，比較のため上述した国公立短大の紀要をすべて調べ，同一の調査が行われていないかどうか検討したが，調べた限りにおいて皆無であった。もちろん専門学校においてこうした検討がなされている可能性はあるが，当科とは事情もだいぶ異なると思われる。以上のようなことから，今回得られた結果のみに基づいて若干の考察を行うこととした。

1．初回就職について

慢性疾患やリハビリテーション関連疾患の増加に伴い作業療法士の需要は高く就職は全体として好調である。毎年ほぼ100%の就職率を示しているのは当科にとっては喜ばしいことであるが，同時にまた就職が基本的には個人的な事であることから，例えば地域の基幹病院に当校の卒業生が必ずしも就職しないという状況も出現している。

求人との関係であるが，10期生（卒業者18名）に対する全求人数は333人（18.5倍）であった。日本作業療法士会の算出した全国の推定求人数は，同年度で養成校1校あたり平均141名となっているので[1]，当科はかなり高い求人数といえる。しかし余剰求人数は平成9年以降減少していくといわれており[1]，このような好調さが今後いつまでも続くとは考えにくい。

一方道内からの求人は72人（4倍）であった。道内外の就職の割合を見ると，当科では92%が道内となっている。当短大看護学科の場合は10期生までの就職者の87%（473名中411名）が道内，13%（62名）が道外であった[2]。従って道内に多い就職状況は当科のみではないと考えられる。

初回就職を見てみると，全体として身障領域が最も多く，精神，老年と続いているが，さらに詳しく調べてみると，身障領域では内容的に老年領域と重複しているところが見られる。例えば疾病としては身体障害領域であっても患者が老齢であるといったように，純粋に身体障害領域というよりも，むしろ広い意味の老年障害領域が就職の中心となっていると考えられる。

また北海道では国公立病院に身体障害に対する認可された作業療法施設がほとんど皆無であることも見逃されてはならないであろう。

精神科領域が最近少しづつふえているのは，精神科作業療法やデイケアの充実による施設増がその一因であろう。一方小児領域はなかなか就職者数が伸びない。これは施設そのものが少ないことに起因している。小児発達領域は作業療法の中では歴史的にも古く重要な領域であり，施設の増加が望まれる。

2．分野別に見た就職領域及び離職者について（図5参照）

純粋な身体障害領域が少なくなるに従い平行して老年領域が増えていることが特徴と思われる。また離職者も少しづつ生じているが，当科と同じく女性が圧倒的に多い看護職の場合と異なり，各職場での作業療法士数は1～数名であり，特に1名の職場においては作業療法士が離職することにより施設そのものに大きな影響を与えることになる。

3．就職先の移動について

初回就職先から他の職場へ移動するまでの期間は，身体，精神，老年の3つの分野でほぼ一定で，1期生から6期生までを対象に考えると，ほぼ42ヶ月（3年6ヶ月）という結果が得られた。領域に関わらず移動への期間が一定していることは，転職では領域の違いはあまり大きな問題でないことを示しているといえよう。

次に初回も含む転職全体について考察する。転職先については老年をも含む身障領域へ移る者が圧倒的に多い（両者であわせて65%，表1参照)。また同一領域の職場へ移る割合を各領域別に比較してみると，身障，老年，小児では34～53%が同一領域の職場に移動するのに対して，精神科領域だけが26%となっている。先に述べたように精神科の作業療法やデイケア施設は数的に増加しているが，転職する際に他領域に比べて敬遠される傾向がある点は精神科領域に特有の問題があるのかも知れない。

日本作業療法士会の調査によっても，1990年（平成2年）度では精神科関係の病院・診療所・保健福祉関連施設に勤めているのは13%であり[3]，また1994年（平成6年）7月時点でも精神障害関連への従事者が17%であること[4]を考えると，精神科関係の作業療法士の活動の場の充実が今後一層望まれるところである。

5 ま と め

当科の1～10期生の就職動向を調査した。全体としては身体障害領域への就職が多いが，内容的には老年期の症例を中心とする分野に拡がる傾向があった。また精神科領域も次第に拡大しているが，転職の場合敬遠される傾向があった。

これらの結果と比較するための他大学の結果は，北海道のみでなく本州の国公立医療短大作業療法学科でもまだみられていない。また就職の動向を決める求人側の状況の分析なども検討課題である。これらをふまえてさらに今後作業療法士の就職状況について検討を進めていきたいと考える。

文　献

1）日本作業療法士会福利部：平成5年度求人状況及び初任給調査報告．作業療法．14：85-89，1995
2）北海道大学医療技術短期大学部看護学科：北大医短大部看護学科年報．第1号～第9号，北海道大学医療技術短期大学部看護学科，札幌市，1985～1993
3）日本作業療法士会白書委員会：作業療法白書，第3節；作業療法士（協会員）の就職状況．作業療法．10：31-37，1991
4）日本作業療法士会企画調査委員会：作業療法士の職域拡充について．作業療法．14：179-193，1995